
異世界にて

東雲 陽葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界にて

【Nコード】

N2633Y

【作者名】

東雲 陽葉

【あらすじ】

ウサギのせいでトリップしたけど俺たちアリスじゃねえし。とりあえず二人を探すか。その前にここどこだよ？ 三人がお互いを探して旅をして帰り道を探して、恋をして？ 復讐！？ の旅もします。

1話目 ウサギのせいで

「ねえ、ウサギがいるよ」

「はあ？ウサギ？普通町中にウサギなんかいるわけないだろ」

突然のっぽの将輝まさひるがのんびりとした声をあげる。

下校途中幼馴染三人はムサイながらもいつも男三人だけで帰る。

女っ気が欲しいと思うがこの三人、女に興味がないという思春期にあるまじき三人だった。

つまり、彼女いない歴〓年齢の高校生男児である。

「いや、ほら」

「ウサギ・・・まじかつ!？」

都会と言うほど都会でもないが田舎というほど田舎でもないある意味中途半端な町だった。

近くには森や山などは無くて、ビルに囲まれている街中だ。

そんな中ぽつんと丁度白の白線の上にいる小さくて真っ白なそれ。

同系色だった上に少々遠いので気付かなかったが確かにウサギがいた。

「おいおい」

「学校のウサギかな？」

「小学校か？」

秦二しんじが小走りで近寄って後ろからひょいっと逃げる間も与えずに捕まえる。

秦二は動物が好きだった。

大きいのも小さいのも、獰猛なトラやライオンであっても好きだった。

た。

秦二はよしよしとウサギの頭を撫でながら二人のところへ戻った。

「ここらじゃ一番可能性のあるのは学校だろうな」

「飼ってたもんね」

「けど今でも飼ってるか？」

ここから一番近いのは三人の出身小学校。

当時飼育係の秦二はウサギの世話をしていた経験がある。

密かに個人的に名前だっつけて愛着を持っていた。

ちなみに彼がつけた名前はまる、ばつ、さんかく、しかくだ。

それを二人は知らない。

「飼ってるだろ。学校は命の大事さを学ばせるためにペットの一匹や二匹飼うもんだ」

「あゝクラスでも飼ってたもんね。・・・ナマズ」

何故ナマズ。

メダカやザリガニ、カメなどではダメだったのだろうかと思
う。

ナマズの雷太。

不思議すぎる。

「つか、あれ持ってきたの誰だっけ？」

「さあ？」

「気付けばいたな」

三人ともナマズの雷太には興味が全くなかった。

動物好きの秦二だって興味がなく、飼育係であったがナマズに関し
ては一切手をつけていなかった記憶がある。

だがいつも誰かが世話をしていたのか餌が定期的に入っており、水も綺麗だった。

「「「?/?/?」」」

誰もナマズを気に掛けなかったことが不思議なのか、それともそれの世話をしていた人間を知らない事が不思議なのかそれぞれ首をかしげる。

「まあ、とにかく学校に持ってこうぜ。カギが開いてて脱走しただけかもしれないし」

「だがカギは先生持ちだぞ。逃げるか？」

「どっかで穴があいてたかもな」

飼育係の記憶でも掃除、餌やりの時は必ず先生が開けて先生が最後に数を数えて先生がカギをかける決まりになっている。

数年の時が経とうともそれは変わることのない決まりだろう。

「ほら、秦二、ウサギ渡せ」

「おう」

諸事情で自分の足で小学校まで行けない秦二は素直に慧涼けいすけにウサギを渡すとすぐさま将輝の肩に担がれる。

どうせならおんぶとかのほうが体的には楽なのだが男同士でおんぶも定番のお姫様だったことも遠慮願いたい。

将輝はのっぽの上に道場の息子だけあって筋肉ムキムキの体を持っている。

しかしそれで怖がられないのは顔が非常にゆるゆる顔なせいだ。

逆に顔の怖さは三人の中でも特に細身の慧涼である。

彼は性格がクールというか己に関係ないことは一切切り捨てるよう

な人間であるため顔がなまじ整っており、かつ釣り目であることが性格の悪さのようなものを際立たせてしまっているのである。

なお、この物語主人公は三人の中間で剣道を習っている分筋肉質ではあるがどう見ても横二人に比べると力も頭も足りない主人公である。

「あー、あー」

「あー、あーうるせえ。黙っとけ」

「気持ち悪い」

「吐かないでよ？」

肩に担がれてしかも腰を折ってのくの字状態。

しかもこれから行く場所、正確にはその門前近くにトラウマを持っている秦二にとっては気持ち悪くなるのは道理だった。

肩で吐かれてはたまらないと少し急ぎ足に小学校まで走り抜ける。

「ついたよ」

「うい」

学校の敷地に入ったら下ろされるかと思いきや飼育小屋までそのまま担がれてしまった。

大人しく肩から下りると慧涼が怪訝な顔で飼育小屋を見ていた。

「どった？」

「鍵は掛かってる。おまけに穴も開いてなさそうだ」

「え？じゃあこいつどっかの家の飼うウサギ？」

学校じゃないとすればどっかの家のウサギしかない。

もう夕日が沈みかかっているあと1時間もしないうちに夜になる。

このままでは連れて帰るしか選択肢が無くなる。

いや、もうそれしかないのだ。

「どうするべ？」

「どうするってどうするべ？」

意味もない言葉を出してみる。

動物を飼ってはいけないという家訓も動物を軽視する人間も三人の家にはない。

だが一時的にウサギを連れて行ってウサギは環境の変化に耐えられるだろうか。

動物は環境の変化に耐えられず一日ですぐ死んでしまうことがある。

「うおっ」

「うお？ おお！」

「わあー、慧涼神々しいよ。後光差してる？」

「いやいやいやいや！！明らかウサギだろ！光ってるのウサギだから！」

本気なのか冗談なのか分からない将輝の言葉に慧涼はわたわたと突っ込みながら手を精いっぱい伸ばして自分の体からウサギを遠ざけようとする。

もつとも、ウサギは手にあるままなので意味がない。

そうしている間にも手のひらサイズのウサギがより強く光って辺りを真昼のように明るく照らす。

正直暗さに慣れた目にはきついほどの光だった。

1 話目 ウサギのせいで（後書き）

初めて投稿なのでドキドキです。至らないところは許してください。
すみません。努力はします。けど結果は求めないでください。

2話目 森（前書き）

2話目にしてちょっと暗い話です。血が出るとかではないので安心？してください。

2話目 森

「っ・・・」

目をうつすら開くも秦二は自分の目が見えないことを自覚した。とりあえずうつ伏せになっている状態から寝返りを打って仰向けになる。

そして目が見えないまま焦ることなく大きな光が目を眩ませたのだと他人事に考えた。

「将輝、慧涼、無事か？」

目が見えないということなんて難儀なことだろう。体を起して手探りで二人を探すがおかしなことに返事が返ってこない。

そのことは目が見えない以上に秦二に焦りを感じさせた。その時ふいに鼻に甘い匂いが入ってきた。

「!？」

甘い、甘い匂いだった。

お菓子の甘い匂いではなく、どちらかと言えば花の匂いで、それは秦二が遠い昔嗅いだ事のある匂いだった。

なぜ今まで気づかなかったのか不思議なくらいここはその匂いで充滿していた。

秦二はひゅっと息を飲み、座った状態で後ずさりした。手にカサリと植物の感触がする。

いや、最初からその感触はしていた。ただ、気にかけていなかった

だけ。

しかし、気づいてしまえばその感触も秦二には恐怖にすぎなかった。

「うあ・・・」

その時にはもう目がだんだん明るさに慣れてきていた。

目が、見えてくる。

歪んだ視界に見える色は赤。

赤、赤、紅。

赤い、紅い色はこの世で秦二がもつとも嫌いな色だ。

秦二はその色を認識した途端無様にもその場から逃げだした。

「あああああ！！！」

頭には幼馴染の姿などなく、ただただ、その場から遠くへ行くことだった。

匂いも感じない、色も見えない場所を目指してただ走った。

途中転んだって嘔吐したって恥も外聞もなく走る。

その姿はとても醜かった。

「ぐっ、げほっ、げほっ」

やがて大きな樹に辿りつく。

どのくらい走ったのかわからないが気づけば匂いはしなかった。

走ったせいか、先ほどの恐怖か、ドッドッと鳴る心臓のある場所をたたいて木の根元に汚物を吐く。

汚物と言っても出るのは胃液くらいで固形物、半固形物は一切なかった。

「はっ、はっ」

精神的にも体的にも疲弊した秦二はそこから少しだけ離れた場所
横になった。

「最悪、だ・・・」

記憶の中で最も嫌いな記憶を思い出させられた上に二人の確認も忘
れて逃げ出したことは秦二の気分を最悪なものへとした。
怖くて逃げた自分も情けない気持ちになる。

「どこだよ、ここ・・・」

冷静に思い返すと走ってきた獣道には草木しか生えていなかった。
山の中と言いたいのが傾斜もない場所を山とは言えない。

そもそも今までいたのは小学校の校庭で秦二たちの住むところに丘
はあっても山はない。

そうなるここがどこだか皆目見当がつかなかった。

ウサギは好きだがこの時ばかりは変なウサギを怨まずにはいられな
い。

どう考えてもあのウサギを拾ってからよくないことが起こる。

「くそウサギが。俺たちはアリスじゃねえつつうの」

ウサギが案内するのはアリスで十分だと思う。

秦二は不思議の国のアリスを思い出しながら今までの疲れもあって
すうっと眠りについた。

2 話目 森（後書き）

微妙に暗いですねえ。

1 話目でも秦二についてちょっと書きましたが主人公はトラウマ持ちなんです。

精神的には3人の中で最弱主人公。こんな主人公ですがよろしくお願いします。

3話目 少女

木漏れ日が差す部分が温かく感じながら秦二の意識は夢と現のはざまにあった。

意識そのものは起きているのだが体が起きることを拒絶している。原因はすぐそばで聞こえる子守唄だった。

近い所で歌っているとはわかるが、声はとても小さくて、旋律がようやくわかるくらいだった。

よって正確には子守唄とは言えないかもしれないが秦二にとっては十分子守唄に聞こえていた。

優しくて、優しく、秦二は自分の心が穏やかになるのを感じた。声の主が知りたくて目をこじ開けると唄は止まってしまった。

「あ・・・」

声の主は女の子だった。

長い、銀色のような非常に薄い紫がかかった白のような色の髪の毛を地面すれすれまでなびかせている女の子だった。

秦二はすぐ近くとわかっていたものの、まさか自分の体から50センチも離れていないとは思ってもいなく、思わずぴょんっと飛びのいた。

「うわっ」

「!？」

あまりに素早い動きと驚きように女の子は逆に自分も驚いてしまう。

「「・・・・・・・・」」

不思議な沈黙が辺りを包む。
たつぷりと十秒以上は見詰め合ったところ、沈黙を破ったのは女の子の方だった。

「あの、大丈夫ですか？」

「え？ あ、はい。大丈夫です？」

何が大丈夫なのかさっぱりだったがとりあえず大丈夫と答えてみる。疑問的だったが女の子は気にしていないようでほっと頬を緩ませた。異性に対してさほど免疫のない秦二はそれがやけに照れくさくなり、そっぽを向いてしまう。

「よかった。うなされていたみたいでしたから」

「あ、ああ・・・（そういうこと）」

大丈夫と言う理由を知ってうつすらと寝るというより気絶に近い瞬間の前を思い出す。

夢を見た覚えはないのだがうなされていたと言うからはそうなのだろう。

彼女に嘘をつくメリットもないので嘘でないことはすぐにわかるし。

「それにしても人がこんなところまで来るなんて珍しいですね」

「え？」

ここがどこかわかっていない秦二は女の子の言葉に面食らった。

確かにここら辺が獣道しかないあたり人が踏み入れない場所だと思当は付いていた。

しかし単純にここを抜ければ舗装された道に出ると思っていたし、まったく人が来ないというほどではないと思っていたのだ。

実際、目の前の女の子はここにいますので本当に珍しさはないと思っ

ていた。

「あの、ですね、俺・・・じゃなくて僕は迷子になったようなのでここがどこだか教えてくれませんか？友人とはぐれたみたいで・・・あ、友人を見ていませんか？一人はのっぽで、ちよっとぼやっとした感じのとツリ目の意地の悪そうな顔した男なんですけど・・・」

「いいえ。すみません」

「そ、そうですか・・・」

しゅんっとなぜかひどく落ち込まれた様子にこっちが焦る。

秦二はもう二人が近くにいないことは分かっていたのでダメで元々の気持ちだったのだ。

居たら居たらでよかったぐらいだ。

「えっと、それで場所なんですけど、ここはコーボルトの森の最東端の島です。でもすごいですね。いくら迷子とは言えこんなところまで来るなんて」

「え？え？」

コーボルトの森？なんだそれは？外国の森か？いやいや、島と言っているから島国なんだろう。きっと日本やフィリピン辺りのように島の集合体なんだ。

生憎と地理は得意でない秦二は混乱しながら必死にコーボルトという地名を思い出そうとした。

少なくとも自分の生まれ育った場所にそんな森は存在しない。

そもそも海に面している街ではないので島と言うのはおかしい。リアルに頭を抱えてゴロゴロ転がりたい気持ちに駆られるが理性でそれを押しとどめ最後には知らないものは知らないと開き直った。

「ごめんなさい。知りません」

「え？コーボルトの森ですよ？」

「そもそもコーボルトがわかりませんでした」

土下座する気持ちで深々と頭を下げる。

彼女にすれば常識のことも自分は知らないのだ。

知らないったら知らないのだ。

「ええっと・・・コーボルトは地名で、王都より東のセスティア地方の中で特に東に位置する場所です」

「王都？って王様がいる王都？」

「は、はい」

彼女はとても困惑した表情を見せた。

それはそうだろう。

彼女にとって、いや、この世界の人々にとっての常識を目の前の男、つまり秦二は知らないのだから。

子供だって知っている常識を自分と同じ年頃の男に説くというのはおかしい話だった。

「ごめんなさい、ちょっと待ってください・・・」

王様って、イギリスとか？

エリザベス女王とかしか王様というのは思いつかない秦二。

とりあえず日本ではないことはしっかりと認識した。

秦二はそこに考えがいきつくとはっとなって自分の喉を両手で押さえた。

彼女と自分の言語が同じということに今さら気づいたのだ。

海外であったなら日本語は通じないはずだ。

彼女が日本語が堪能であるなら別の話なのだが気づいてしまいさえすれば聞こえてくる彼女の言葉が日本語ではないことにも気づく。

（いままでどうして気づかなかったんだろ・・・）

自分の鈍さ加減にあきれ果てる。

今までしゃべっていた自分の言語は日本語ではなかった。

もちろん彼女の言語も。

話す言葉の発音は耳慣れないが言葉の意味は脳が勝手に翻訳して処理していたらしい。

その処理があまりに自然で当たり前のように感じていたので気づかなかった。

一度気づけば自分の境遇の異常さにも気付けてしまう。

「あ、あの」

「ごめんなさい。落ち着きました」

とりあえず状況が分からずオロオロとしている女の子の手前自分のことを話すわけにいかないので立ち直ったふりをして彼女と向き合う。

「まず、あなたの名前を聞いてもよろしいですか？」

「あ、はい。私、シオンっていいいます。あなたは？」

「僕は秦二です」

シオンと以外にも日本の名前で名乗られたので少々意外に思いながらへえと軽く感嘆する。

髪の色にしても顔立ちにしても日本人離れはしているが以外と日本に近いのかもしれない。

「シンジ、さんですね。よろしくおねがいします」

「こちらこそよろしくおねがいします」

互いに頭を下げたときにさらりと彼女の髪が前に垂れる。
その時見えた普通の人間にしてはあり得ないような先のとがった長い耳に絶句した秦二は悪くないと思いたい。

3話目 少女（後書き）

遅々として進みません・・・毎日更新している方々はいつ書いているのか疑問に思ってしまう。こうして書いていて改めてすごいと思いました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2633y/>

異世界にて

2011年11月16日02時10分発行